

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Virginia Woolfにおける"elegy"の変遷： 死者との交流の可能性と限界

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Watabe, Sayoko メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1364

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



氏 名 渡部 佐代子

本 籍 兵庫県

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 甲第 3 1 号

学位授与年月日 2 0 1 2 年 3 月 2 3 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項に該当

【昭和 2 8 年 4 月 1 日文部省令 9 号】

学位論文題目 Virginia Woolf における“elegy”の変遷
—死者との交流の可能性と限界—

審査委員 主査 神戸市外国語大学教授 御輿 哲也

委員 神戸市外国語大学教授 新野 緑

委員 神戸市外国語大学教授 辻本 庸子

委員 大手前大学総合文化学部教授 太田 素子

1. 論文内容の要旨 3 6

2. 論文審査結果の要旨 4 0

1. 論文内容の要旨

本論文は、ヴァージニア・ウルフの長篇小説『ジェイコブの部屋』(*Jacob's Room*, 1922)からほぼ年代順に『幕間』(*Between the Acts*, 1941)まで五つの作品を取り上げ、主な作品世界のなかに共通して見られる作者の亡き家族への“elegy”を中心テーマに、死者と遺された者たちとの交流の可能性と限界について考察することを主要な目的とする。ウルフは13歳から約10年間という短い歳月のなかで両親兄妹を相次いで喪い、記憶に貯えられた家族の面影に自分の想像を織り交ぜながら描くことで亡き家族との交流を図ろうとした。特に、そうした試みは『ジェイコブの部屋』、『ダロウェイ夫人』(*Mrs. Dalloway*, 1925)、『灯台へ』(*To the Lighthouse*, 1927)、『波』(*The Waves*, 1931)において他の作品に比べ顕著であり、そして『幕間』においては自分自身に迫る死の意味について問うことから、そこに彼女の死生観を見ることができる。ウルフが作品のなかでどのように死者との交流の可能性に迫ったのかを考察して行き、そこから最終的に彼女の死生観について結論を導きたい。

第一章において、亡き兄への“elegy”という側面を持つ『ジェイコブの部屋』を取り上げ、死を運命づけられた主人公ジェイコブ・フランダース(Jacob Flanders)の存在の希薄さと周りの人々の彼を捉えることができない焦燥感から死者と遺された者たちとの埋めようのない距離を明らかにし、さらにジェイコブが海岸で見つけて家に持ち帰る羊の頭骸骨とギリシア旅行で訪れたパルテノン神殿のモチーフを手がかりに死のなかにある堅固さについて検証を進め、ウルフの死生観を導き出す。発表当初から批評家の間ではジェイコブの存在の希薄さが指摘されてきたわけだが、その主な理由として彼の意識が直截に描かれていないこと、語り手の距離、そしてこの作品が作者ウルフにとって「死者を描く」ことを目的としているため、彼女の意識の上ではジェイコブがすでに亡くなっているということが挙げられる。彼が死すべき運命にあることは、彼の姓によって明らかであり、作品を通して彼と共に存在し続ける頭骸骨のモチーフによってさらに強調される。

しかし、ウルフは生と死の狭間で揺れる幻影のようなジェイコブの存在に堅固さを与えようとした。この作品と同じ頃に書かれた短篇「堅固な物体」(“Solid Objects”, 1920 発表)を見ると、ウルフは主人公ジョン(John)が執着する「ガラス」、「磁器」、「鉄」から有用性が奪われ死の様相を呈していながらも、死がもたらす強い存在感によって、死のなかに堅固さが備わっているという考えを表明している。そうであるならば、『ジェイコブの部屋』で描かれた頭骸骨と廃墟となったパルテノン神殿にも死を乗り越えて永続する堅固さという共通点を見出すことができ、そこにウルフが死のなかに確固としたものを求める気持ちを読み取ることができる。

次いで、第二章で取り上げる『ダロウェイ夫人』では、亡き家族をモデルとした人物は登場しないが、主人公クラリッサ・ダロウェイ(Clarissa Dalloway)が戦争神経症に苦しむ帰還兵セプティマス・ウォレン・スミス(Septimus Warren Smith)の死を悼み、さらにセプティマスが親友エヴァンズ(Evans)の戦死を偲び“elegy”を謳い上げようとするように、この作品

においては戦争の犠牲者を哀悼する“elegy”の側面を見ることができる。

最終場面において、クラリッサはパーティの席で偶然セプティマスの自殺の報せを耳にし、彼の死が自分にとって重要な出来事であると感じ「死はコミュニケーションの試みだ」と考える。クラリッサと彼女の分身とされるセプティマスとの関係に焦点を当て、全く面識のないこの二人が生死の世界を隔ててなされた交流の形を明らかにする。彼女がいうコミュニケーションとは、言葉がなくとも相手のことを理解できたと思える心の交流を意味する。彼らはあらゆる表面的な部分において異なるけれども、根底では強い類似性がある。例えば、彼らは過去に親友との間に交わされた心の交流をいつまでも大切な思い出として胸に刻み、その一瞬に執着する。彼らは現在の生活に以前のような交流を見出すことができず、常に孤独を感じながら生きており、誰とも堅固な人間関係を築くことができない。彼らは現在の生活に向き合うことができず常に意識は過去へと向かう。

しかし、彼女がパーティ会場から離れて小部屋へと退き独りきりでセプティマスの死について熟考するとき、彼女は死のなかに真のコミュニケーションの可能性を見る。そして偶然眼にした向かいの部屋に住む老婦人の孤独のなかにも意思を持って生きる姿にセプティマスの死を重ね合わせ、彼が“the privacy of the soul”を守るために生命を投げ出したと考え、彼の勇気ある生き方を賞賛する。彼女は彼の死を通して生命の重みを実感し、自分の人生を見つめる機会を持ち、彼らのように自分が選んだ人生を生き抜く決意を抱く。見知らぬ青年との交流であるがゆえに、独りよがりという危険性を孕んでいるけれども、クラリッサにとっては紛れもなく充実感を得ることができた一瞬の心の交流であることが分かる。

続いて第三章では、両親への“elegy”という想いが込められた『灯台へ』を取り上げ、素人画家リリー・ブリスコウ（Lily Briscoe）が亡きラムジー夫人（Mrs. Ramsay）の肖像画に取り組む姿に、ウルフが亡き母の面影を描く姿を重ねあわせ、ウルフがこの作品を通して母の死と向き合い、喪失感を乗り越えるための重要な作品であったことを明らかにする。

リリーはラムジー夫人の肖像画に取り組み、埋められない“space”に悩まされ絵を完成させることができない。この“space”は夫人の捉え難い本質であり、夫人が居間で独りきりになって灯台の光を見つめ恍惚感に浸るときに感じる「楔形をした暗闇の芯」でもある。それは夫人の内奥にある意識であり、自分自身を取り戻そうとする孤独な部分、『ダロウェイ夫人』のクラリッサが守ろうとした“the privacy of the soul”と重なる。そして、リリーが描くラムジー夫人が紫色の三角形であることは、ある程度夫人特有の「楔形の暗闇」をなぞっていながらも、真に夫人の本質を捉えられていないことを示唆する。

また、この作品では後期印象主義の画家セザンヌ（Paul Cézanne）の芸術を連想させるイメージを見ることができる。リリーが夫人の意識について“secret chambers”又は“the dome-shaped hive”という視覚的イメージで表現するとき、そこにセザンヌの「ギュスターヴ・ジェフロワ」（“Gustave Geffroy”, 1895-6）の肖像画のように対象を複数の視点から捉える構図が浮かび上がる。一枚のキャンバスに収まりきれない夫人の複雑な人間性は、表面的には

ヴィクトリア朝の典型的な考え方や振る舞いを示しながらも、内奥では女性の独立を好意的に認め、さらに自分自身の人生においては何事にも主体的に取り組み、人々の交流を創り出すことに執心するといった生き方にある。そしてこうした生き方を理解することが夫人の本質を捉えることにつながる。

10年後、リリーは第一次世界大戦やラムジー夫人の死によって失われたものを求め、再びキャンパスに立ち、過去と現在をバランスを取りながら見つめようとする。しかし、夫人の「不在」という現実には心臓を締めつけられるリリーは、夫人の「存在」の大きさに圧倒されて過去に飲み込まれてしまう。ラムジー夫人が創り出した過去の空間に浸るとき、人との結びつきを大切にした夫人の生き方の一部に触れる。リリーは夫人のさまざまな面を思い出しながらも完全に理解することが不可能であることを悟り、夫人の孤独な部分を“space”という形で残すことで絵を完成させる。最後にキャンパスに引かれた中心線には、彼女の心のなかに生まれた強靱な意志、過去を現在との関わりにおいて捉え直したことへの達成感を読み取ることができる。

そして「私はヴィジョンをつかんだ」という言葉は、思い込みという危険性を孕んでいるが、ヴィジョンを確実なものにしたいというリリーとウルフの強い願望の表れであるといえる。リリーの姿に自分と画家である姉ヴァネッサを重ねあわせ、作品のなかに絵画の可能性を取り込み、語ることと対象を見る視点を導入したことが、作者ウルフのヴィジョンに静かな手応えのある奥行きを与えたことは間違いあるまい。

第四章において、再び亡き兄を偲ぶ“elegy”の側面を持つ『波』を取り上げ、作品のなかの球形のイメージをモチーフに主人公バーナード（Bernard）が言葉で創り出す七人の友情の形が「輪」（“ring”）から「滴」（“drop”）へ、そして最終的に「水晶」（“crystal”）へと変化していく過程を追い、彼が堅固であるがはかないと感じる友情から生者との交流だけではなく死者パーシヴァル（Percival）とロウダ（Rhoda）との交流にも限界があることを示す。さらに、これまでの作品では登場人物たちが失われたものを追求してきたけれども、この作品では六人が親友の死を乗り越えて自分たちの人生を生きて行こうと模索する姿が丁寧に描かれており、そこにウルフの意識のなかにある“elegy”の変遷を見ることができる。

小説家を志すバーナードは子供の頃から言葉で人とのつながりを形作ろうとし、将来七人の物語を書くことを試み、「言葉にならない言葉」という感覚的な言葉で本質を捉えようとする。

彼が創り出す七人の友情が輪から濃密な滴の球体へと変化するにつれて、彼自身の自己も六人との交流によって養われ、豊かなものへと成長していく過程を見ることができる。青年期には七人の関係は、肉親にも近いような強い絆を備え、炎のように燃え上がるような「七面体の赤いカーネーション」や神聖さを思わせる「天上の水銀」に譬えられるが、パーシヴァルの事故死は六人の友情に変化をもたらし、彼らは個別に親友の死を悼むことになる。六人が多角的に、そして冷静に死を見つめる姿から、ウルフが作品を重ねて行くなかで彼女なりに死の意味に迫ることができたことを読み取ることができる。しかし、バーナードが絵画という“silent art”の世界に救いを求め、悲しげな聖母に自分の深い喪失感を重ね合わせるように、や

はりそこには言葉による死者との交流に限界があったことも事実である。そして、歳月の経過とともにパーシヴァルを思い出すことが少なくなり、ロウダの自殺した理由を理解できないことから、死者と遺された者との距離が浮き彫りになり、改めて死の理解し難さが明らかになる。七人の物語を完成することができないバーナードは、人間の頼りなさを実感し、自己をなくした男となって“blindness”の状態に陥る。だが、また同時に彼は幻の句を引き連れた“loveliness”が戻ってくることを願い、身体の内には波のように高まる昂揚感を抱きながら死に挑みかかる。そこには遺された者として精一杯生きて行こうとするバーナードの強い意思を理解することができる。

最終章において、遺作『幕間』が第二次世界大戦下に執筆された事実から、この作品で見られる死への眼差しが亡くなった人たちの死、つまり「過去の死」からこれから起こりうる「未来の死」へと移り変わり、劇作家ラ・トロウブ (La Trobe)、ジャイルズ (Giles)、イザベラ (Isabella) を通して「未来の死」が「過去の死」に比べていかに理解し難いものであるかを明らかにする。第二次世界大戦勃発の3ヵ月前を舞台とした『幕間』では、古き良き時代のイギリスが再現されながらも、決してこれまでの作品で見られたような豊かで暖かさを感じさせる情景は描かれず、「窪地」に建てられたポインツ・ホールのうつろな世界が作品全体に広がる。登場人物たちは常に孤独のなかに沈んでゆき、交流を求めようとはしない。ただラ・トロウブはパロディ的なパジェント「英国史からの諸場面」を演出することで、距離を取って過去を見つめ、過去を批判的に捉え直すことを観客たちに訴えようとする。しかし、舞台の役者たちの台詞と蓄音機の不協和音は、人々の融和など不可能であることを示唆している。

それぞれが言葉にできない、そして理解し難い内面の葛藤を抱え、自分の生死がどちらの方向に進んでいるのか分からず、「地獄の辺土」で生きまどう彼らに残されたものは喪失だけである。生きることを疑う閉塞した社会において、生に確たるものを見出すことができず、また未来の死を見つめることも理解することもはかない努力でしかなかったのだ。

最後に、リリー (画家)、バーナード、(小説家)、ラ・トロウブ (劇作家) といういずれも素人の芸術家の登場に注目すると、彼らの芸術を追求する姿勢にウルフが芸術家として自己確立を試みた軌跡を見ることができる。皮肉にも三人の芸術家たちが十分な成功を収められなかったように、ウルフも自分の不確かさを見つめることになるが、死を見つめ、生の意味を問うことは、彼女の人生観に影響を与えたことは事実である。それゆえ、彼女は捉え難い死の意味を繰り返し問い続けた。しかし、大戦を前にこれまで「生きること」に真正面から向き合ってきた彼女は、もはや生と死の意味を問うことが無意味な行為であることを悟り沈黙の世界に沈潜して行く。けれども、この沈黙には絶望という側面を持ちながらも、また別の一面として人々が思う以上に現実が危ういもろさを抱えていることを示そうとした作家ウルフの無言の訴えがあったことは確かであろう。